

【大槻英世 × ルチオ・フォンタナ】

■大槻英世

1975年宮城県生まれ。1998年東京造形大学造形学部美術学科卒業。
主な展覧会に2013年「BORDERS」アルマスギャラリー（東京）、「ダイチュウショー 最近の抽象」府中市美術館&LOOP HOLE（東京）、2012年「第八回造形現代芸術家展」東京造形大学附属横山記念マンズー美術館（東京）、2011年「Behind the mask ～ゆりあげの女～」ZENSHI（東京）など。マスクングテープを模倣した作品を制作。

■ルチオ・フォンタナ

切り裂いたキャンバスが作品を象徴するアーティスト。ミラノの彫刻家の父と、アルゼンチン人の母の間に生まれ、1949年にキャンバスに穴をあけた作品を初めて制作し、「空間概念 CONCETTO SPAZIALE」というタイトルがつけられた。その後のシリーズ・タイトルとなる。眼前に迫ってくる原色のキャンバスに、不気味な裂け目を入れて表現した作品はキャンバスという寡黙な存在に光を与えたといっても良い。

《選択作品》

Concetto Spaziale Rosso

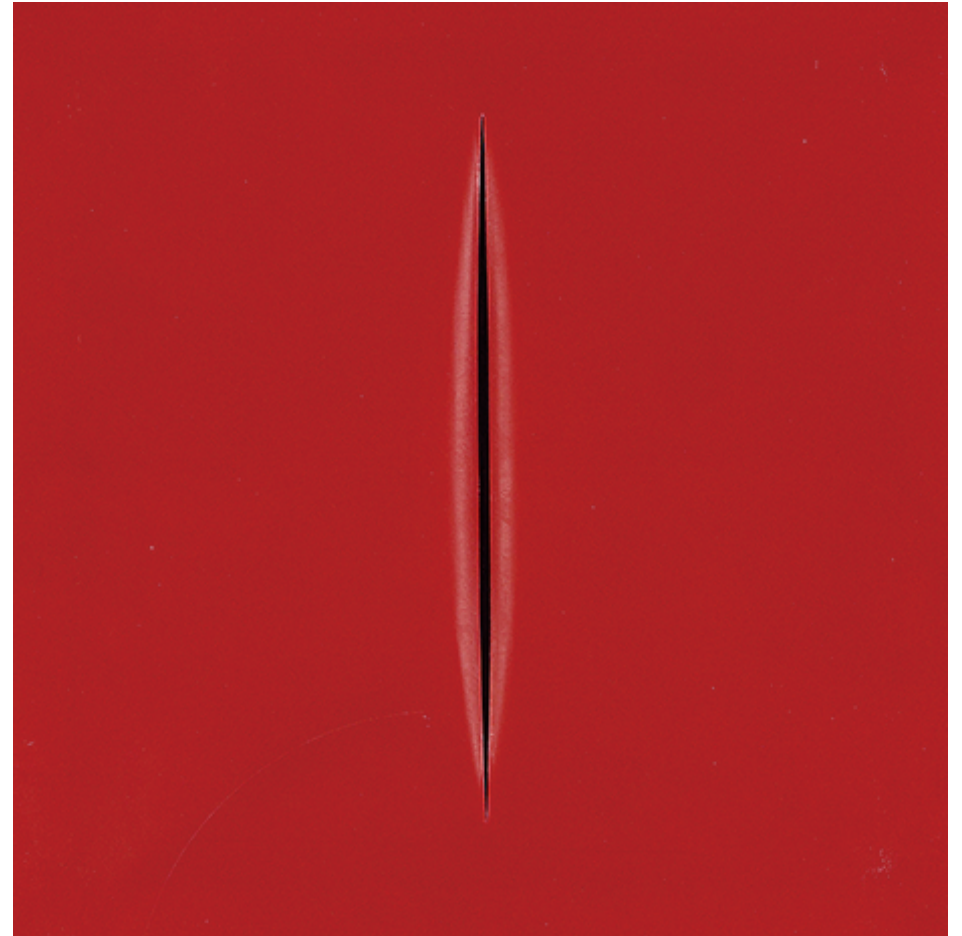
1968

plastic

29.5×29.5cm

《作家のコメント》

フォンタナの作品を見た小さな女の子が「ティッシュの箱の口みたい」と嬉々として笑っていた。その子の見え方は新鮮だった。切り裂いた向こう側に無限を見るなら、こちら側にも無限があるんじゃないかと。果たしておまえの作品はどうなんだと厳しく問われている。



Concetto Spaziale Rosso（ルチオ・フォンタナ）

【大槻素子 × ジャック・ピアソン】

■大槻素子

1979年 東京生まれ

2007年 東京造形大学大学院美術研究領域絵画専攻修了

< 個展 >

2008年 大槻素子 innocent bystander/Galerie Sho Contemporary Art

2011年 a blank/ アルマス GALLERY

2012年 ゆっくり動く / Gallery SPEAK FOR

2012年 ぼんやりと遠くに見える / Takashi Somemiya Gallery

2012年 遠くへ行くこと / Takashi Somemiya Gallery

■ジャック・ピアソン

ジャック・ピアソンは1960年マサチューセッツのプリマス生まれ、1984年にボストンのマサチューセッツ美術カレッジ (Massachusetts College of Art) を卒業している。その後ボストンからニューヨークへと移り住み、マイアミ、パリ、ロサンジェルの放浪の旅を8年間続けていた。人生、愛、欲望、記憶、道徳などの日常生活の心底にある感情を大きなテーマに関心を持ち、写真イメージ、看板用に作られた立体文字を利用したオブジェ作品、インスタレーション、ドローイング、コラージュ、絵画、写真ボジ利用のライトボックス作品など多様な表現に取り組む作家。

《選択作品》

At Night

C-Print

96.5×76.5cm



At Night (ジャック・ピアソン)

【門田光雅 × アンディ・ウォーホル】

■門田光雅 www.mitsumasakadota.com

画家 1980 年静岡県生まれ。2001 年東京造形大学絵画専攻卒。今日の社会状況をモチーフに絵画を制作、展開。07 年「ART TODAY」(セゾン現代美術館)、11 年「VOCA 展」(上野の森美術館)など個展・グループ展多数。

■アンディ・ウォーホル

世界でも最もポピュラーな 20 世紀後半を代表するポップアーティスト。1962 年にキャンベルスープ缶のシリーズを発表以降、コカコーラや洗剤等の消費財やマリリンモンロー、エルヴィスプレスリー等の有名人など、大衆社会のわかりやすい素材をモチーフにした作品を発表している。いち早くシルクスクリーンの技法を取り入れ、大量生産・大量消費という高度資本主義の構造をアートに持ち込みながらも、同時に彼の作品からはそういった時代背景へのある種のシニカルさを感じられる。その人生観を含めた生き様そのものが伝説的な存在となっている。

《選択作品》

Perrier

lithograph (Original)

80.6×61.5cm

《作家コメント》

今回、私は小石川に昔流れていた「千川（小石川の旧称）」からヒントを得て展示に臨んでいます。千川は現在、千川通り沿いに暗渠（地中に埋設されている川）となっているそうです。そして、その小石川にポップアートを代表する西洋の水、ウォーホルの「Perrier」があり、小石川と美術の文脈、それぞれの目に見えない深い場所に流れるものを意識し展示を試みました。

出品した作品は「DEEP RIVER」という F60 号の新作です。



Perrier (アンディ・ウォーホル)

【梶見幸司 × 草間彌生】

■梶見幸司 <http://kjksm.com/>

1976年千葉県生まれ。1999年早稲田大学政治経済学部卒業。

2003年「Artist by Artist」森美術館（村上隆氏の選出で参加）

2005年写真集「PHOTOGRAPHY ITSELF」出版（帯文日比野克彦氏）

■草間彌生

日本で最も有名な前衛作家。幼少の頃より幻想的な作品を制作し1957年より米に拠点を移して活動を行う。派手な水玉をあしらった作品は代表的でその風貌、生き方等々さまざまな面で話題に事欠かないアーティスト。ルイ・ヴィトンとのコラボなどでも話題となった。

《選択作品》

水玉の集積

1994

etching 45/50

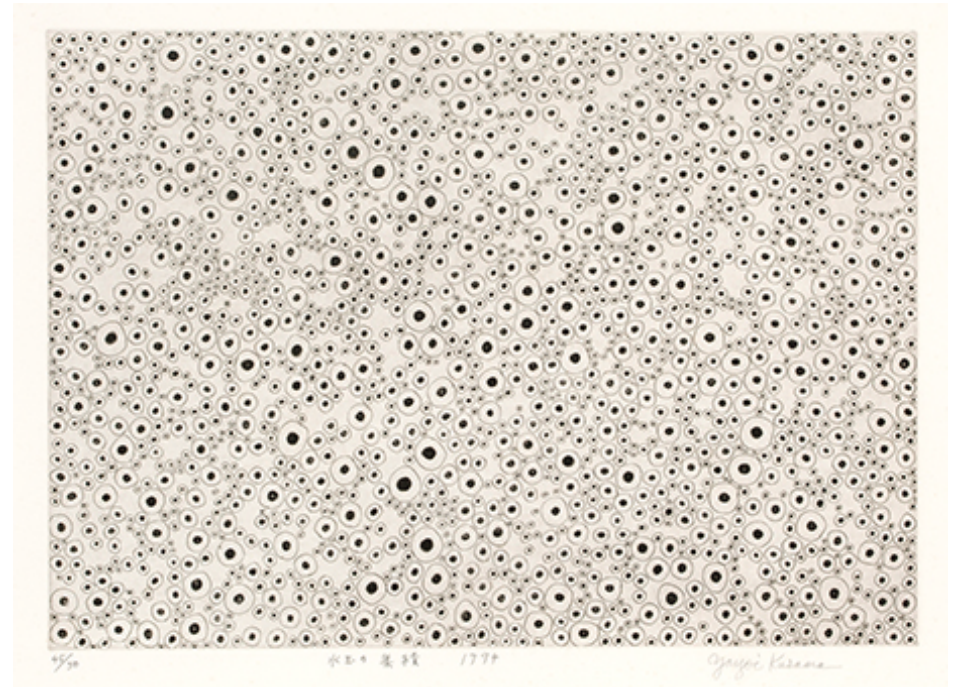
45.5×63.0cm

《作品のコメント》

現在、ドキュメンタリー写真はデジタル時代を迎え、画像修正が容易になったことからその信頼性がゆらぎ、そしてまた映像メディアの台頭によりその必要性も低下し、発表の場も少なくなって久しいと言えます。しかし、写真技術が発明された頃の主な用途は眼前の光景をコピーし記録することでした。そしてまた、日本ではフォトグラフは直訳の光の絵ではなく、真を写すという意味で「写真」と意識されています。そこで今回、写真の原点回帰を目指しながら現代的な手法でドキュメンタリー写真を制作できないかと思い東京の記録写真に実験的に取り組みました。

記録としての写真に必要とされるのは客観性です。つまり主観性の排除です。ですので、今回はそこに固執して自分という主体を限りなく皆無にすることに挑戦しました。東京の路上でガラケーのカメラを使ってノーファインダーでシャッターを切るだけの撮影を行い、さらにグーグルで東京という言葉で検索してヒットした画像を切り取り、両方の画像をセレクトもせずただただ並べるという作業を繰り返し、かつて報道写真が隆盛を迎える原動力になった小型カメラで撮影されたフィルムのコマ（135サイズ）のアスペクト比（縦横 2:3）のイメージを作り上げました。そこには主題となるような特定の被写体はありません。しかし、東京の圧倒的なボリューム、リアルと非リアルのカオス、そして蠢くエネルギーをある意味「真」として写すことができたのではないかと考えています。

今回、並列して展示させていただいた草間彌生の「水玉の集積」を選択した理由は写真と絵画、無機的と有機的、正気と狂気などの対比を意識したからです。この選択するという作業で自分の作品を新たな視点で認知できることができたので、とても興味深い展示となりました。ありがとうございました。



水玉の集積（草間彌生）

【小林悠子 × 奈良美智】

■小林悠子

2004年東京造形大学絵画科研究生修了

2004年 Willem de Kooning Academie Hogeschool Rotterdam 短期留学

2007年 千駄木空間「川向こう」

2008年 switch point 「星の瞬き草木の瞬き」

2010年ギャラリー世都「はなののはなの」

他ブックギャラリーポポタム Gallery 慳 ギャラリーかれん gallery café ni modo にて展示

■奈良美智

ニューヨーク近代美術館（MOMA）やロサンゼルス現代美術館に作品が所蔵されるなど世界的に評価されている日本を代表するアーティストの一人。大きな頭と、にらみつけるような目の女の子をモチーフにした作品は国内外で人気が高くオークションでも常に高値がつく。子供の純粹無垢さと、時折、垣間見せる、悪意が同時に存在する彼の作品は、現代人の心に響く強いメッセージ性がある

《選択作品》

Untitled(Angel)

2008

color pencil on envelope Original

26.5×19.2cm

《作家のコメント》

封筒に描かれたエンジェルというより、私には手のひらを見つめる少女が空想によって自らの背に羽を付けた…。というように思え、それは自分が制作する時の感覚の様子を描いている様に思ったので、この作品を選びました。それは何かをじっと見つめた時、頭の中ではそれがいっぱいになってイメージされる様子です。作品と関わる事によって感じられる、大きさや触感、イメージと体感が見た方にも想像していただけたらと思います。



Untitled(Angel) (奈良美智)

【谷正也 × ゲルハルト・リヒター】

■谷正也

1981年 大分県生まれ

2004年 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 卒業

■ゲルハルト・リヒター

ドイツの画家。現在、世界で最も注目を集める重要な芸術家の1人であり、「ドイツ最高峰の画家」と呼ばれている。1960年代から、フォトペインティングやカラーチャート、何層にも重ねた色が響きあう抽象画など、一貫して絵画の本質を追求しながら様々な試みに挑戦し続けている。2012年サザビーズロンドンにて、抽象画の「Abstraktes Bild」が、生存する画家の作品としては史上最高額の2132万ポンド（約26億9000万円）で落札された。

《選択作品》

Kanarische Landschaften II-e

1971

Heliogravure 24/50

39.5×50.1cm

《作家のコメント》

私の作品は日常の風景を撮影し、パソコン上で特殊なエフェクトをかけます。それを絵画のアナログな手法で再構築します。画面上に浮き上がる線に印象派の影響を受け、一つのタッチの中に複数に色が混ざり切る前の状態を含ませます。

今回出品した作品「行方」はスカイツリーから俯瞰した画像が素になります。東京の圧倒的な存在にエフェクトをかけ、デジタルとアナログの共存した画面を視覚化する事が目的です。



Kanarische Landschaften II-e (ゲルハルト・リヒター)

【平丸陽子 × 草間彌生】

■平丸 陽子

画家 1979 年埼玉県生まれ。2002 年東京造形大学美術学部絵画科卒業。
2003 年同大学研究科修了。絵画作品を中心に個展、グループ展などを行う。

■草間彌生

日本で最も有名な前衛作家。幼少の頃より幻想的な作品を制作し1957年より米に拠点を移して活動を行う。
派手な水玉をあしらった作品は代表的でその風貌、生き方等々さまざまな面で話題に事欠かないアーティスト。ルイ・ヴィトンとのコラボなどでも話題となった。

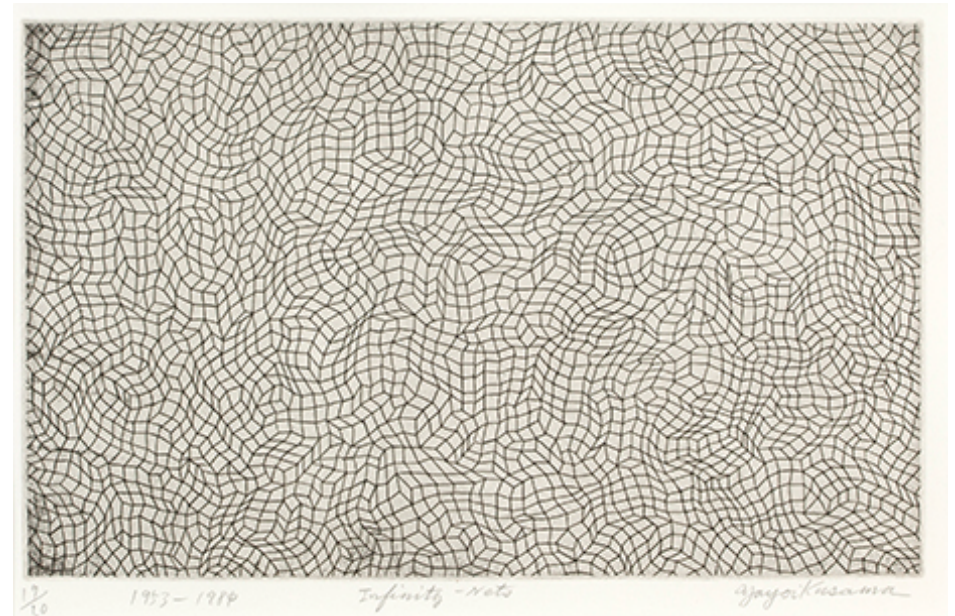
《選択作品》

infinity nets

1953

etching 19/30

45.7×63.0cm



infinity nets (草間彌生)

【松本春崇 × アンディ・ウォーホル】

■松本春崇 <http://harutakamatsumoto.com/>

1958年生まれ。多摩美術大学大学院修了後、フランス政府給費を受け1987-89年パリのエコール・デ・ボザール留学。2003-04年文化庁の派遣によりニューヨーク滞在。「四つ」をモチーフに写真や映像、絵画、彫刻、プロジェクトなど多岐にわたる作品を発表。今年の主な活動は「賛美小舎」横浜美術館（神奈川）、「縄文式市市川考古博物館」（千葉）、「つないで結ぶ寺地小学校」（東京）など。

■アンディ・ウォーホル

世界でも最もポピュラーな20世紀後半を代表するポップアーティスト。1962年にキャンベルスープ缶のシリーズを発表以降、コカコーラや洗剤等の消費財やマリリンモンロー、エルヴィスプレスリー等の有名人など、大衆社会のわかりやすい素材をモチーフにした作品を発表している。いち早くシルクスクリーンの技法を取り入れ、大量生産・大量消費という高度資本主義の構造をアートに持ち込みながらも、同時に彼の作品からはそういった時代背景へのある種のシニカルさを感じられる。その人生観を含めた生き様そのものが伝説的な存在となっている。

《選択作品》

Marilyn Monroe I Love Your Kiss

1964

lithograph ED2000

41.2×58.1cm

《作家のコメント》

私がアンディ・ウォーホルの作品を選んだのは、彼の作品の中に4つのイメージを使ったものがあるからである。私は一貫して4をモチーフに、あるいは4を使ったシステムによる作品を制作しているが、ウォーホルの4はいつも私の作品を支えてくれている。

今回の作品は筆を用いず、筆の代わりに縄で描いた縄文式の絵画である。また使用している色は4色のみで、かつて古代ギリシア絵画にあった4色を使って描くという考え方を踏襲している。今は現存しない古代ギリシアの4色絵画が持っていた芸術造形哲学と日本の縄文芸術の出会い、もしくは融合を意図した。

さらに、4人の家族で構成されたイメージは、たまたま目にしたヴィトゲンシュタインの家族的類似とレヴィストロースのクラインの四元群を当てはめた家族構成の理論を無理やり「家族」という言葉でくっつけ、絵画で表現したものである。4人の顔のイメージは、インターネットから探し出した色々な家族の写真から適当に四つの顔を選び、新しい家族として使っている。このように私の作品はいつも4によって串刺しにされている。



Marilyn Monroe I Love Your Kiss (アンディ・ウォーホル)

【村田真 × 杉本博司】

■村田真

1997年、東京造形大学絵画専攻卒業。『ぴあ』編集者を経て美術ジャーナリストに。2005年に絵画制作を再開。ナディッフギャラリー、BankART スタジオ NYKなどで個展、「表現するファノン」(札幌芸術の森美術館)、「The HUMANISATION」(東京都美術館)などに出品。2013年には第45回日展に出品し、落選を果たす。

■杉本博司

現在世界で最も注目されている日本人アーティストの一人で写真家。その作品は写真の領域を越え、コンセプチュアルアートの可能性を広げている。写真作品では大変めずらしく、1億円を超える価格で落札された事もある。時間とは、生命とは、現実とは、等のテーマを完璧な仕上がりの写真作品で表現されている。

《選択作品》

SEA OF JAPAN OKI 1987

1991

オセロリトラ ED500

24.0×31.0cm

《作家のコメント》

WALLS TOKYO のコレクションのなかで、杉本博司の《海景》がもっともミニマルで扱いやすいと考え、選択した。が、ギャラリー名や展覧会名を鑑み、杉本作品をいじるのではなく、1階から2階へ《海景》を移動した跡の「壁」を描くことにした。結果的に杉本作品でなくてもよかったともいえるが、垂直・水平線による幾何学的構成は《海景》に準じている。おまけとして展示した《コンセント》は、このギャラリーにコンセントが異常に多いことに触発されたもの。これらのコンセントは以前この場所がシェアハウスとして使われていたことの名残であり、これもギャラリーのコレクションと捉え、倍加してみた。これらはいずれも「サイトスペシフィック絵画」である。



SEA OF JAPAN OKI 1987 (杉本博司)

■安田豊

1979年福島県生まれ。2007年東京芸術大学大学院博士課程修了。主な展示 2008年スカートの中は紙吹雪 (KIDO Press, Inc.)、2012年うつつ展 (愛知県美術館ギャラリー)。2011年から家族写真を中心に発表。

■ウルフガング・ティルマンズ

様々な雑誌で活躍後、ドイツに拠点を移した後、精力的に個展を開催。確固たる評価を得る。作風はよくある日常の風景のスナップのような無造作な作品がみられるが、それは厳選されたモチーフであり、実際には厳密に配置してつくられたフィクションであることが特徴的。

■インベーター

フランス出身のストリートアーティストであるインベーターは、1990年後半から、パリの町中に、モザイクタイルで作成したインベーターゲームのキャラクターを貼付けるというゲリラアート活動を始めた。彼の作品は、かの有名な [HOLLYWOOD] の看板をはじめ、今や世界 40 カ国の都市に侵略している。

《選択作品》

Help (ウルフガング・ティルマンズ)

1998

C-Print 5/10+1

30.5×40.5cm

TK_64 (インベーター)

2010

Ceramic tiles Original

13.9×25.8cm

《作家のコメント》

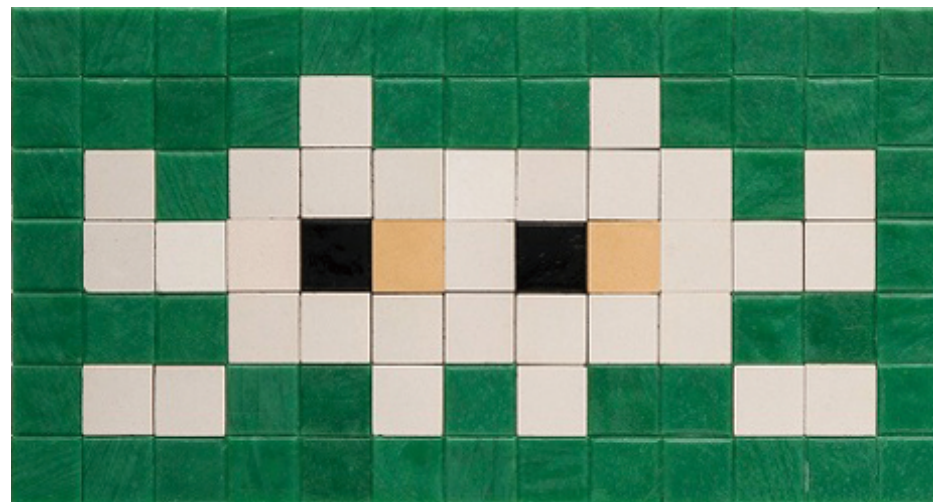
私は、2011年頃から家族など身近な人物やその周りの出来事をカメラで記録しています。今回は、Walls Tokyo が所有する作品から少し欲張ってティルマンズの「Help」という写真作品とインベーターの「TK_64」という作品を選び私の写真と展示させて頂きました。

ティルマンズの「Help」を見た時に、ヴィト・アコンチの女性がしっくりつづいた目を男性が無理矢理こじ開けようとする映像作品「こじ開け」を連想しました。そこで、今回はこの「こじ開け」をベースにして記録していた私の写真を拡大しトリミングし「Help」というタイトルをつけて展示しています。撮影は、フラッシュフジカという昔のファミリーカメラで私の娘（8歳）にお願いしています。

インベーターの「TK_64」は、今回の企画が決まった際に Walls Tokyo の所有作品を拝見させて頂いて、街の中では無くギャラリーの白い壁に展示されていたからか所有作品のなかで何となく異質な感じがして気になりました。インベーターは懐かしいアーケードゲームを思い浮かべますが、侵略者や侵入者という意味があります。他国からの移民者と言う意味もあるみたいです。今回は、撮影時にインベーターのイメージをカメラと家族との間に入れました。家族という身近な存在ですが、インベーターが入ることによって急に距離を感じました。また、家族が成長する際に、この距離と侵入者（他者）の存在が必要かなと改めて実感しています。インベーターの作品は、2階の「白い壁」の会場にはありません。1階の Walls Tokyo の片隅に展示されています。



Help (ウルフガング・ティルマンズ)



TK_64 (インベーター)

【渡辺望 × 杉本博司】

■渡辺望 <http://watanabenzomi.com/>

2009年多摩美術大学大学院修了。主な展覧会に2013年「糸を分ける」gallery COEXIST-TOKYO(東京)、「Unknown Hisotry」アユミギャラリー(東京)。2012年「Ground Channel」岡本記念美術館(千葉)。2011年所沢ピエンナーレ「引込線」(埼玉)など。インスタレーション、映像、音、ドローイングなど多様な表現を用い、詩的でコンセプチャルな作品を制作・発表。

■杉本博司

現在世界で最も注目されている日本人アーティストの一人で写真家。その作品は写真の領域を越え、コンセプチュアルアートの可能性を広げている。写真作品では大変めずらしく、1億円を超える価格で落札された事もある。時間とは、生命とは、現実とは、等のテーマを完璧な仕上がりの写真作品で表現されている。

《選択作品》

History of History

2008

offset print 26/50

70.5×70.5cm

※「歴史の歴史/History of History」シリーズからの作品。

歴史の歴史(反重力構造)。本作品はオフセットプリント5点組の作品集の一部。

《作家のコメント》

「反重力構造」は杉本博司氏による奈良の当麻寺(たいまでら)をモチーフとした作品です。2008年に行なわれた金沢21世紀美術館「杉本博司 歴史の歴史」展では12メートルという天井高を生かし、塔を組み上げるように展示されました。(http://www.sugimotohiroshi.com/AntsGravitatedJP.html)

本企画で選択した作品は、この「反重力構造」で使用された作品の一部となります。

今回、私は杉本氏のコンセプトに着目し、会場内の空間を使って重力という人類が未だ抗いつづける力について再考します。



History of History (杉本博司)